＜論文＞

日露戦争の日記と写真と軍事郵便

礒　永　和　貴
人間科学部・国際交流学科
isonaga@toua-u.ac.jp

＜要　旨＞

日露戦争では、兵士によって本来は軍事機密である多くの日記が書かれ、戦場と内地を結ぶ軍事郵便も頻繁に交わされ、そのなかに日記や写真も同封された。本論では、陸軍看護兵であった緒方惟芳の日記と写真について、代表的な従軍日記と比較して検討を行った。その結果多くの日記が戦場やその後において内地で書き加えられていることが判った。しかし、緒方惟芳が書いた日記は実際に戦場で書かれたそのものであり、写真も撮影されたものである。

キーワード：日露戦争、陸軍看護兵、従軍日記、軍事郵便、従軍写真帳、撮影、軍事機密、検閲

はじめに

近年、一般の日本兵たちが書いた日記や軍事郵便が注目を受けている。最も日露戦争の史料紹介は早くから行われ、色川大吉の「日露戦争下のある農民兵士の記録－大沢上等兵戦中日記－」（東京経済大学人文自然科学論集 24、1970 年）がその嚆矢というべきものであろう。しかし、なぜ軍事機密ともいうべき日記や軍事郵便が書かれ、写真が撮影されたかにかについての基本的問題はあまり問われていない。

写真１　南嶺舎営病院手術室の惟芳

日露戦争に参戦した、現山口県萩市出身の一人の兵士がいる。陸軍看護兵の緒方惟芳（おがたただよし）（1883 ～ 1945）である。惟芳はその従軍期間の一部を記録した「日露戦争従軍日記」（以下、「緒方日記」と略）２冊と「日露戦争従軍写真帳」（「以下「写真帳」）１冊などを残した[1)]。「写真帳」には 20 枚の和紙に 67 点の鮮明な戦場[2)]や兵士の日常が見られ、日露戦争を惟芳の目からとらえた貴重な写真である。写真１は惟芳のポートレートで、墨字で表題を「南令（嶺）舎営病院手術室ニ於テ写ス」とし、裏面には「明治三拾八年八月下旬、於清国盛京省昌圖南方南岑（嶺）撮影之、當年弐拾弐年五ケ月」とある。明治 38 年（1905）７月 30 日から同年 10 月７日まで惟芳が居た南嶺舎営病院の手術室の写真である。惟芳は夏服姿で肩に赤十字の腕章、机上に薬品の瓶などの医療用具や帽子が置かれ、壁に白衣やタオルが掛けられている。兵士のポートレートや印刷の写真帳は良く見られるが、戦場で個人が撮った写真は珍しい[3)]。また、写真は汚れや折れがほとんどなく、明治期の他の写真と比較しても保存状

態は極めて良く、惟芳が戦場を持ち歩いたとは到底考えられない。緒方家には明治以来の写真帖も現存するが、その写真よりはるかに鮮明である。

一方の「緒方日記」の１冊目は縦7.5×横11㎝、厚さ1.3㎝で、表紙・裏表紙は３ｍｍの頑丈な厚紙できた横長の手のひらサイズの手帳である。上部には手帳を閉じたゴムの残片と小型の鉛筆を差し込む筒が付いている。表紙は外れており背表紙は擦り切れて無い。２冊目の手帳は１冊目より大きく縦15×横9.3㎝、厚１㎝、表紙・裏表紙1.5ｍｍで測量の時に使う「野帳」である。こちらも小口に小型の鉛筆を差し込む筒がある。両日記とも鉛筆で書かれた短文のメモが多く、天気のみの箇所や記載がない頁もあり戦場を持ち歩いたことが容易に想像される。

本論では、同じ看護兵の多田海造（黒木第一軍）の「従軍日記」[4]（以下､「多田日記」と略）、野戦衛生隊員（乃木第三軍）の西川甚二郎の「従軍日記」[5]（以下、「西川日記」と略）、一般兵士の日記として歩兵（黒木第一軍）であった茂沢祐作の「従軍日誌」[6]（以下､「茂沢日記」と略）、輜重兵で通信所所員の伍長（黒木第一軍）であつた根来藤吾の「征露日誌」[7]（以下、「根来日記」）、予備役三等軍医であり第八師団衛生隊付（乃木第三軍）であった加健之助「日記」[8]（以下､「加藤日記」）などの刊行された代表的な「日記」[9]と比較して「写真帳」の特徴と写真がなぜ鮮明な状態で残ったのかについて検討するものである。

なお、日露戦争のいわゆる「従軍日記」の原題は「日誌」とするものが多くあるが、ここでは全て「日記」としている。

1.日露戦争と緒方惟芳

日露戦争は日本が初めての本格的な近代戦争で、日本の総兵力は108万人、死者は約８万４千人、ロシア側の死者は約５万人とされる。未曽有の被害を出した戦争ではあったが、兵士たちが四六時中敵との壮絶な戦闘の中にあった訳ではない。戦闘の無い日がほとんどであった。一体彼らは、戦場でどのような生活を送っていたのであろうか。ここでは、その前提として日露戦争と緒方惟芳の関係について概要を述べておこう。

緒方惟芳は明治37年（1904）８月28日に、すでに開戦していた日露戦争へ「歩兵第十一聯隊補充大隊」として、「第五師団野戦病院」への従軍の命を受け同月28日に広島の宇品港を出発した。９月２日に遼東半島にある「南尖」（現、遼寧省大連市荘河市）に上陸し戦闘を繰り返して北進を続け、最北は「崔家堡」（現、遼寧省鉄嶺市昌図県崔家溝）に至った。その距離は直線距離でも実に300キロ以上に達する。ようやく明治38年12月27日に鉄嶺（現、遼寧省鉄嶺県鉄嶺市）から汽車に乗り、同月30日に大連を出港して翌39年１月３日に再び宇品へともどった。日露戦争後は広島陸軍衛戍病院で勤務しながら苦学をし、明治44年（1911）に医師免許を取得して大正元年（1912）に後備役に編入され、同年に現山口県阿武郡阿武町の無医村で病院を開業し地域の医療に尽力した。昭和20年（1945）の日本が敗戦した９月14日に62歳であの世に旅立った。日記と写真はその後に惟芳の長男である緒方正道氏により偶然発見されたもので、惟芳は家族に日露戦争の話はあまりしなかった。次の史料は惟芳の「軍隊手帳」からその看護兵としての日露戦争の任務の全期間をまとめたものである。この記録は惟芳の戦場での行軍と一致するので図１に番号で示し、行軍の地名で比定できたものも記入している。また、比較のために日露戦争の日本軍の進軍図を付した。惟芳の第五師団は野津道貫が率いる「野津第四軍」であった。

1.同月（明治37年９月）十六日「タイエルトン」（大楽屯）着。同日第五師団第四野戦病院に編入。同年同月同日（明治37年９月）より同二十四日迄「タイエルトン」に於て野戦病院の業務に従事。
2.十月九日より十五日迄沙河附近の戦闘に参与。
3.十月二十三日より二十九日迄「シンヅアン」（新庄）に於て患者療養所の業務に従事す。十月二十九日より三十日迄、新庄に

於て野戦病院に従事。

4.明治三十八年一月二十七日より同二十九日迄、黒溝台付近の会戦に参与。

5.同年二月下旬より三月中旬迄奉天付近の会戦に際し、三月一日より同五日迄古城子に於て野戦病院に従事。

6.同月六日より同十日迄崔家堡に於て野戦病院の業務に従事。同年三月月三十日より五月二日まで崔家堡に於て舎営病院従事。

7.同年七月三十日より同年十月七日まで、南岺（嶺）に於て舎営病院の業務に従事。

惟芳が日露戦争で参加した戦闘やその後の病院で任務まとめてみる。明治 37 年 8 月 25 日から 9 月 4 日まで遼陽会戦で傷ついた兵士を 9 月 16 日から 24 日まで大楽屯野戦病院で治療している。10 月 8 日から同月 20 日の沙河会戦では 10 月 9 日から 15 日までの間直接戦闘に参加、10 月 23 日から 28 日まで新庄の患者療養所で看病した。沙河の会戦は結局決着がつかず日露両軍は沙河を挟んで対峙し越冬する。その後、明治 38 年の 1 月 25 日から同月 29 日までの黒溝台会戦に参加した。2 月 21 日から 3 月 10 日までの日露両軍 60 万人の兵力が 18 日間に激突した当時世界最大の奉天会戦に参加し、惟芳は兵士の治療に 3 月 30 日から 5 月 2 日まで崔家堡の舎営病院であたった。明治 38 年 5 月、東郷艦隊は遠征のバルチック艦隊を撃滅し、海軍力を失ったロシアも講和を決意し同年 9 月にポーツマス講和条約が締結されたが、その後も惟芳は満洲の地にあった。滞留を続ける日本軍（満州軍）の治療のために 7 月 30 日から同年 10 月 7 日まで南嶺舎営病院で治療を続けたのである。

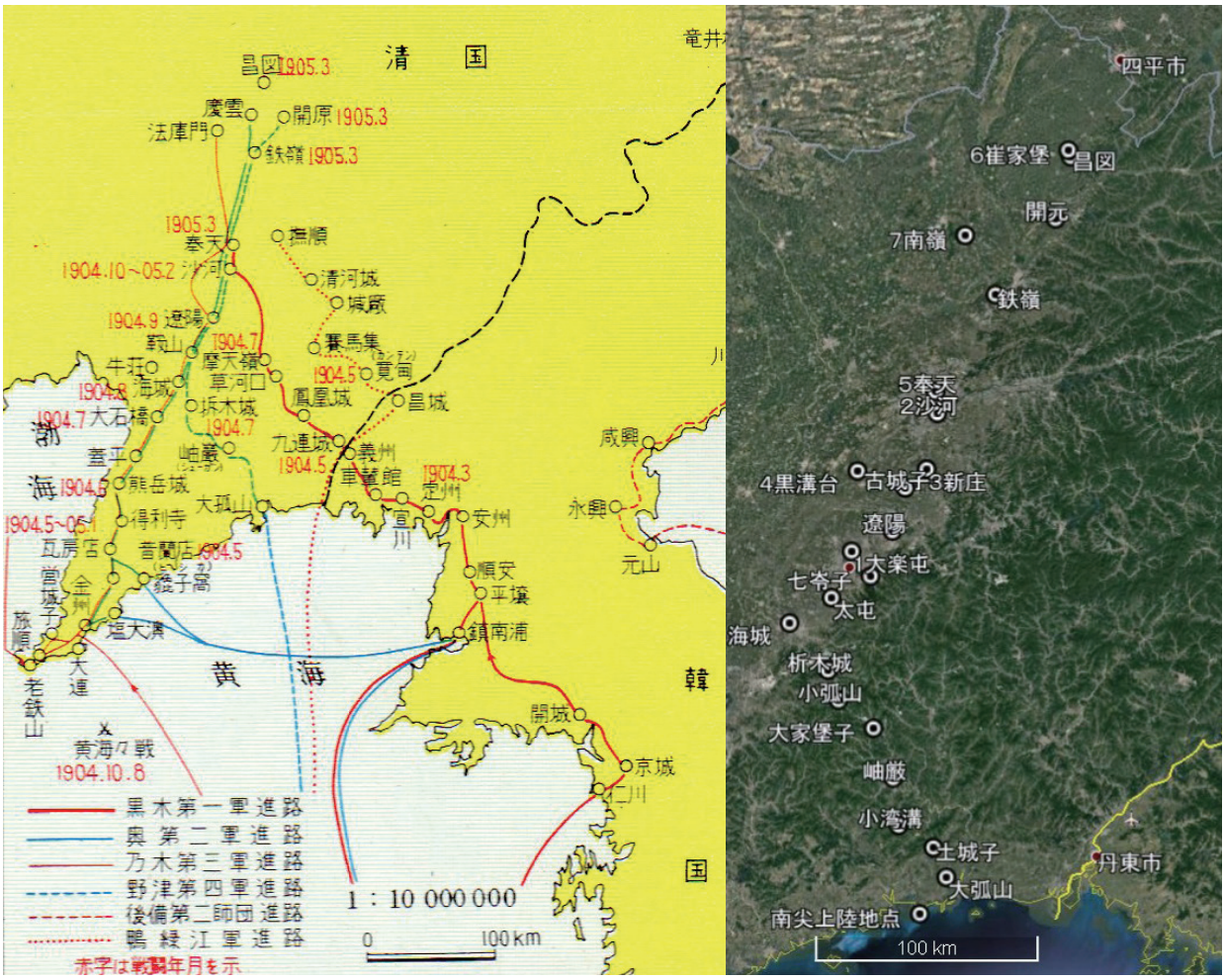

図 1　緒方惟芳の行軍と日本軍の進路

注）右図はグーグールアース、左図は日本大辞典編集委員会編『日本歴史地図　第 49 図　日露戦争』1974 年を利用し改変して掲載した。

2.「緒方日記」と「写真」

すでに指摘したように「緒方日記」や「写真帳」は戦争の残虐な記述や写真もあるが、「戦場での生活」も記録している。次に日記の一部を抜き出し、その生活の様子を撮影した写真の中から最も典型的な１枚を抜き出して考察してみよう。

明治 37 年（1904）

９月 30 日「終日家に在りて新聞を読了」

10 月２日「終日家に在りて休む。風呂」

10 月３日「終日家に在り。夕食後運動」

10 月 18 日「見習剃官小川氏就職に付て、看護手一同に与へられたる麦酒を宿舎の後方高地にて宴す」

11 月４日「本日前夜芝居の際、花開を為したるにより、花主を呼て一会を為し日没にして終る。実に戦場に在り。然も彼の敵国より占領したる満州に於て愉快に天長節を祝したるを大に賀す。」

11 月 10 日「本日酒を給せらる。飲後東方隣村に至り、支那人の店に至り一話を為し帰る」

11 月 11 日「本日補充として橋本手来る。昨の隣村に至り酒を求む」

11 月 13 日「本日昼食後より運動として村落を遊ぶ。帰りて入浴す」

11 月 21 日「本日遼陽に買物の為め出張を命ぜらる。午前三時、床を出でて準備に掛り、同五時より宿舎を以て、煙台停車場に向て鉄道線路を歩み、七時四十分同地に着。八時二十分の列車にて発。九時二十分遼陽に着す。防寒具を用ひたれとも、寒気の為め手足の痛を覚ゆ。直に城壁内に入り受命の買物を為し、市中を縦横に歩み、午後二時頃停車場に至り、三時二十分の列車にて煙台に向ひ、四時二十分着。直に輜重車輌にて宿舎に帰りたたるとき、日没後一時間なり。本日の遼陽行は、天気好良なれども、汽車内にありては実に寒気を覚え、又長時間の歩行の為め足に痛を覚えたれとも、羅馬塔の如き停車場の如きは、遼陽にて会て見さる所にて、実に愉快なり」

12 月 11 日「終日家に在。夕食後より村辺を散歩す」

12 月 15 日「午前中碁をなしを居りしが、午後より倉舗氏来り。昨年の本日入隊したりたる思を以て、橋本分隊と共に愉快に酒宴を開く。酒保なくして酒に欠乏す。幸いにして下給酒ありて、大に仕合す。飲最も極め愉快を尽せり」

12 月 31 日「本日を以て愈々本年終わる。明年は新しきを向へんと松竹を立つる用意す。戦場に於て愉快に本年を送る」

明治 38 年（1905）

１月５日「本日戦場に於て新年宴会を開く。酒盛」

１月６日「本日正午に於てぼたもちを作る」

１月７日「本日午前十時頃梯隊より、軍曹、蓄音器を持来り。正午迄我宿舎にて音楽を為す。内地にて蓄音機は何のその、然れども戦場にて是の如き音を聞くや内地を思はしむ」

１月９日「本日より帝国憲法学を学ぶ」

６月７日「午後五時事務官から『カブトビール』一本送られば、本日特別加給品として分配せらる酒と共に一えん（宴）」

６月 10 日「舎内外の清潔を計り、庭作、浴場製作も終り入浴」

６月 11 日「本日曇天午前六時起床。本日は慰労の為め音学を遊び楽む。他異なし」

６月 12 日「本日、前日と同しく楽し。且つ交温上「花会」を為す。実に此事は只一の楽のしにして本日限つて禁ぜり。本日入浴」

６月 15 日「本日より心を決死して物理学の研究を為さんとす」

６月 30 日「消燈時刻より斎藤・小林両氏と共に酒を飲み気焔を吐き楽む」

戦闘の無い日には風呂に入り、酒やビールを飲んで宴会をし、音楽も聴き、碁を楽しんだり、新聞を読み、博打（花会）もし、憲法を学んだり物理の研究もした。たまには町に出て買い物をしたし、近隣の村を散歩に出かけたり、満州の人びととの会話を行ったりと、戦場でありながら「生活」も送ったのである。

写真２は、写真の下に「滞在中の娯楽の様

写真２　滞在中の娯楽の様子

子」とある。水筒を持ち奥に立っている満州人の子供は、満州人一家を撮影した写真にも見られ、その解説に「冬営したる李家連達溝村長一家」とある。李家連達溝には日記によると明治37年11月7日から翌38年1月27日まで滞在しており、その際に撮影したものである。一見すると室内のごく普通の食事を撮っているように見られるが、当時の写真を露光に用する時間は長く、静止した状態で撮影するのが一般的であった。この写真を撮っている個所は、明るくなるよう外からの光があたり易くするため、室内が開放されていたことが右側の人物の肩の日差しでわかる（A）。奥は黒布が鋲で貼られており光が入らない工夫がなされ一部に光が漏れている（B）。惟芳の背後には、障子を持つ人物の顔が写っている（C）が、これは現在の「レフバン」の代わりに用いたものであろう。要は戦場の「臨時のスタジオ」をこしらえて、かなり意図的な撮影をし、見られることを想定しているが、兵士の生活の一部を垣間見ることができる。

惟芳は正式な看護兵の制服を着ており戦闘服ではない。惟芳から盃を受けようとしている人物はセーターの上に毛皮のチョッキを着ている。これは「西川日記」の11月23日に「デンチユ一枚支給される」にあたり「殿中羽織」の略である[10]。右側の壁にも装備品が掛けられている。①は「朝日」の煙草である。煙草については「西川日記」の「コラム４煙草」[11]に詳しく、明治政府は日露戦争直前の明治37年7月1日に、戦費調達の一つとして「煙草専売法」を施行した。「朝日」は20本六銭で、吸口に厚紙を巻いた巻煙草であった。煙草は「緒方日記」に加給品として14回記されている。明治38年4月12日の日記には「『ピャーコック』の人情無きの甚しき知る」とあるが、これは村井商会から販売された「ピーコック」のことであろう。「両切」のタバコで、清国で販売されていたが「人情なき」とは不味かったということであろうか。②のブリキの平らな箱には「煙草」をほぐした葉が入っており上には携帯用の煙管が置いてあり、奥には「蓋」と煙管を収納する「煙管筒」が置かれている。加給品の煙草が少なく、何回も楽しめる煙管が使われ

ていたのであろう。③には盃と缶詰が置いてある。缶詰の需要は日露戦争時に軍需産業として広がり「肉、魚、菓子」などが運ばれた。④手前の鉄鍋には大量な豆腐と箸がある。後方の火鉢にかけられ鉄鍋にスプーンがあり豆腐料理がつくられている。豆腐は現地で調達したものであろう。満州は豆腐の産地であり豆腐料理はよく食べられる食品の一つである。その横に針金で作った手製の火箸がある。⑤鍋と鍋との間には水筒と細長い缶詰が置いてある。「茂沢日記」によると「醤油エキス」（明治37年８月16日）や「粉味噌」（明治38年６月10日）があり、豆腐に味付けする調味料の入っていたのかもしれない。兵士への食事などの生活補給品は軍の「兵站部」から正規に渡される「加給品」と、内地の人々の寄贈による「恤兵品」があり、中でも「慰問袋」は多くの品があり兵士の楽しみであった。また、ほぼ10日毎に「俸給」により「酒保」から食料や日用品が購入できた。「緒方日記」にも食のことが日記に36件あるが不足をきたした。その際は満州人から購入したり、無理やり「徴発」したりすることもあった。食品ばかりでなく、宿泊施設や病院なども徴発されることが多かった。この惟芳の越冬も李家連達溝の村長の家を借りたもので、徴発に近かいものであったとみてよかろう。病院も寺や廟などを徴発した写真がある。

さて、「緒方日記」には写真撮影の記載はないが、他の日記には撮影や現像、郵送などが記されている。「茂沢日記」の明治37年５月31日には「岸主計その四名の長岡人（茂沢は新潟県長岡市出身、一家はその後東京市牛込／現、東京都新宿区に移住）の発起になる懇親に臨み、酒肴の御馳走になり記念のために百数十人撮影す」とある。同年11月19日には「午後一時より長岡町一同連隊本部裏にて写真を撮る」とあり、11月21日には「十九日に撮影した写真をみた」とあり、現地での現像が可能で３日間で完成している。多田は出兵する際に明治37年２月12日に東京の竹林写真館で写真を撮影し、２月15日に手にしており、内地も戦場も同じ時間で写真を手にできた。茂沢は明治38年７月21日に長岡の友人から「茂沢の写真を送ってくれ」と頼まれている。また同時に同郷の長岡の軍曹から「来月十八日に長岡町の学校で各国写真師の写真品評会を開設するにつきて、長岡町出身出征軍人一同撮影し出品したいが、それについて本月二十五日頃に第三大隊に集合して撮影しょう」との相談を受け、25日には長岡からの軍人74名が集まり「記念写真」を撮影をしている。明治38年８月19日に茂沢は、盆に中隊長より戦死した安達啓太の墓掃除と「参拝」を命じられ「参拝後（中略）中隊長はその光景を撮影して帰られた」とある。中隊長程度になると写真機を持つ者もいた。８月24日の晩には「連隊の関久作君が面白い写真ブックを携えて遊びに来た」とあって、戦場で写真をアルバム風にした者もあったようである。

「加藤日記」の写真に関する記載は、明治38年７月７日に「午後より写真焼きをなす」とあるのがはじめてである。これ以前に写真を撮影したことは日記には記されていないが、戦闘も一段落して撮りためたものを現像し始めたのであろう。７月８日は「雨天の為に写真焼ならず」とあるが、９日から13日まで、17日、18日に「午後より写真焼をなす」とあり「午後」に連続して行っていることがわかる。７月19日に「本日は写真焼きの一段落付く、半分不成功に終る」とあり、当時の写真が撮影したものの半分程度しか成功しなかったことが判明する。７月20日には「午前中写真焼をなし、是迄焼きたる写真出来せしにより持来れり。午後より写真を送るに決し、いま子（加藤の妻）に手紙、写真九枚、御老父様に手紙、写真十二枚、御父上様に手紙、写真八枚送る」とある。その後に写真は７月21日、22日、24日、８月１日、12日、10日、20日、23日から27日まで、29日から31日までと分けながら郵送されている。途中の７月31日には「夕食後より写真のガラス張をなす」とあり、翌１日にも「ガラス張」が行われた。８月５日には「写真に渡金をなす」、８月10には「写真を焼増す」とあり、１月13日には「本日従卒に写真を焼かしむ」とある。９月25日にも現像を行い、10月１日に送るほか、10月18日、12月８日、同月

14日、15日、18日から23日まで、26日から29日まで、翌38年1月4日と郵送で続々と写真を内地へと送っている。また、明治38年12月10日に法庫門の公主陵を見学した際に写真数枚を撮影し、翌明治39年2月11日には隊長を師団に訪れて撮影を行っている。なお、日露戦争の時は大隊毎に1台が記録用として配置され現地で現像も行われていた。写真は写真師の撮影が一般的であった。

「多田日記」の明治38年2月7日には「安田副旅団副官は写真師と共に来り、我前哨戦の状況を撮影し去れり」とある。10月10日には「兵場脇に作りし所にて招魂祭を執行し、記念のために撮影した」と記されている。11月6日には「土田・渡辺・笹岡・吉田・柿本の諸氏と共に、沙寧堡に至りて撮影」し、11月11日に「去る六日に写真が出来して、各人に配った」とあり5日後に受け取っている。

「西川日記」には明治38年11月13日には「芝居掛、写真写す」と記される。「根来日記」には明治38年11月23日に「先日の写真代として本部に三十五銭（鈴木の分と合わせて四枚)」、11月25日に「過日師団下士にて撮りし写真、今日完成し一枚来る（二十四銭)」とあり販売もなされていた。日露戦争の戦場の写真は、かなり兵士にとって一般的なものであったことがわかる。

惟芳の「写真帳」の写真も戦場において写され、その場で即座に現像されたと考えられる。惟芳の長男の緒方正道氏によれば惟芳は写真が趣味で現像も行っていた。看護兵は薬品に手慣れていることから、写真の撮影を担当した可能性が考えられる。また、惟芳は徴兵前に三菱造船所に勤めた経験があり、その際に写真の撮影や現像に関する技術を習得した可能性もある。緒方家の史料には、明治以来のアルバムがあり惟芳が医者になり撮影し現像した写真が貼られている。また、軍医であった加藤健之助も写真を撮っているので、軍の命令により撮影されたものとも考えられる。

3. 軍事郵便で運ばれた日記と写真

日露戦争の時に制限がなくなった軍事郵便は、発信数2億248万9千通、到着数2億346万4千通、合計4億5912万9千通に達したといわれ、膨大な戦場と内地を結ぶ手段として行き交った[12]。軍事郵便は戦場から出すものは原則無料で、内地からは通常の料金（封書3銭、葉書1銭5厘）であった[13]。また、「根来日記」の明治37年（1904）4月3日に「はじめて渡韓以来の手紙来る。兄（手紙1、葉書2新聞1)、父、皆広島宛のものなり」とある。これは、兵士の戦地での位置がどこかを知られないように情報を統制したことと、まとめて郵送する方が便利だったことにもよろう。日記には逐一軍事郵便の事が記されているとは限らない。例えば本論で検討した「西川日記」には、軍事郵便に関する記載はない。「根来日記」の明治38年3月21日には「書簡は日々の如く来る。今記念として兄より来たりしものを掲ぐ」とあって、全てのものが日記に記されていない。また、「加藤日記」は、写真を郵送していることが確認できるが、その日記の冒頭に次の様に「明治三十八年一月二十四日まで記入の日記帳を遺失」しているので対象としない。ここでは、軍事郵便の来信と発信の両者が記され、内容を詳しく記している「多田日記」と「茂沢日記」を中心に検討する。

図2は、両日記に見られる軍事郵便の通数を月ごとにまとめたものである。多田は明治38年11月29日に、茂沢は12月15日に広島の宇品へ戻ってきているので11月までを検討した。上陸当初は軍事郵便を書く余裕がなく両者ともにその発着数は少ない。しかし、明治37年8月25日から9月4日までの遼陽会戦が終わった頃から徐々に便数が増えている。10月8日から同月20日の沙河会戦では一旦減るが、沙河の会戦は結局決着がつかず日露両軍は沙河を挟んで対峙し越冬する12月から増える傾向にある。明治38年1月25日から同月29日までの黒溝台会戦、それに続く2月21日から3月10日までの奉天会戦の間やり取りが停滞している。4月になると戦闘は小規模な局地戦となり徐々に書く余裕ができ頻繁なやりとりがはじまっている。その後明治38年5月の日本海海戦での勝利によって戦場にも緩んだ

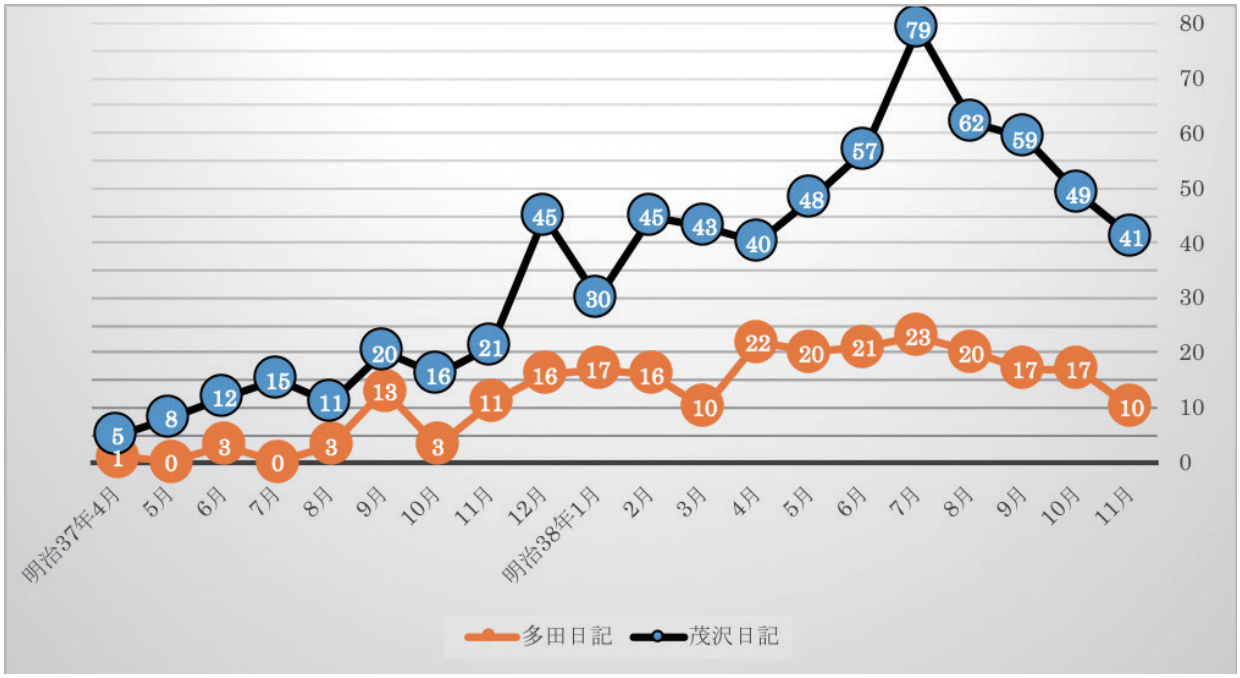

図２「多田日記」「茂沢日記」にみられる軍事郵便の授受通数（数字は郵便の数）

空気が流れはじめ、今までに増してやり取りが行われている。

しかし、日本軍の上層部では、兵士の軍事郵便や日記が極めて懸念の材料となっていた。後に陸軍中将となる多門二郎は日露戦争に歩兵第四連隊小隊長として出兵して日記を残している[14]。すでに黒溝台の会戦後の明治38年２月３日の日記には「先日の戦で、日本兵が持っておった手紙や手帳が、たくさん露軍の手に入ったこれは露軍のために重要なる情報の材料となるであろう。僕等が実際先月29日に目撃した通り、一時わが軍が形成面白くなかったのか、あるいは追撃されたかのか知らぬが、とにかく露軍は随分なわが軍のもの分捕ったらしいことは例の雑嚢一件で明瞭である。今日師団から兵卒の手紙などは一切焼きすててしまうように達せられた」とある。しかし、その命令は全軍に徹底していなかった。その背景には、日本の師団制にあったとみられる。師団は独立して一作戦の単位とされ、それぞれの連絡や共同作戦はほとんどとられなかったことに原因があるように考えられる。「多田日記」の明治38年４月４日には、つぎの命令が記されている。

参謀長の訓示曰く。十一月迄の我軍の行動は悉く敵に知られたり。此は敵の密偵及我軍の捕虜並に死体に付得たる書類によること明白なり。依て下士以下に精神教育をなさしめ、陣中日記を記すことを禁ず。但し、紙片に、二、三日分をかき集め之を内地に送り、若しくは之を能わざる時は梱包となすは之を許可すべし。各隊は研究報告すべし。我中隊は自今日記を記すものは紙片二、三日分を書き納め之を内地に郵送し、若しくは之を能わざる時は梱包となし、若しくは焼き棄つることとなる。

参謀長からの注意は、明治37年11月までの日本軍の行動がすべてロシア軍に知られていたとする。この情報漏れは敵のスパイによるものもあるが、日本軍の捕虜や死体の書類によったものであるとし、下士以下に日記の記載を禁じている。にもかかわらず、２、３日分を郵送や梱包して送ることが許可している。また、「各隊は研究報告すべし」と隊にその決定が委ねられた。この結果、多田の中隊では日記の２、３日分を郵送か梱包で送るか、焼却処分するかの選択が採用されている。多田日記の同年６月30日の日記には「手紙及日誌は之を不必要の

場合には焼棄して決して棄ておくべからず」と再度の命令が出されているが、「不必要」の場合焼却するのであって、必要とあればそのまま保持することが許されていた。アメリカの軍隊は、このような情報漏れを懸念して日記を書くことを固く禁じていた[15)]。いずれにしても明治38年7月を境にして、茂沢も多田も軍事郵便の授受件数が減っていることから、何らかの制限が行われたものと考えられる。しかし、多田は日記を書きながら持ち続け、広島宇品に無事到着した明治38年12月1日に「田辺光吉君へ小包（陣中日誌）を差し出せり」とあり、日本に帰って日記を郵送して、その後に多田は自分の手にした。この田辺光吉は、多田と14通の軍事郵便のやり取りがあって親しかった。12月1日の日記は、「明日二日午後三時三十分広島駅発車の筈。輸送指揮官大枝少佐、同上隊は第一、第二中隊及大隊本部、小行李とす。（後略）」とあって帰還の列車の際に最小限度の荷物のみが許可され、没収される危険性があると考え1日前に小包で郵送したとみられる。

多田は、すでに明治37年4月4日の「被服」「装備品」の一覧に加え、「其他書簡材料」とあり軍事郵便や日記を書く用意をしていた。多田は明治37年3月13日に上陸し、はじめて郵便を出したのは、同年4月28日に「故郷の友人への手紙を認めた」とあるのが最初である。明治38年6月20日の日記には、「茲四、五日来、内地より書簡来らるなり。如何なる結果にや」とし、翌21日に「暫く途切れし書簡も又本日より来始めたり」と内地から郵便を待ち焦がれている。戦場と内地を結ぶ手段として「軍事郵便」は重要な手段であった。上述したような「多門日記」や「多田日記」に記された軍事郵便や日記の中止命令は、兵士にあまり効果はなかったようである。

「多田日記」には、111回に及ぶ軍事郵便の記述がみられる。明治37年6月2日の日記のように「親戚・友人への手紙を認めぬ」のように、何通出したかわからない記述が6か所にあるが、少なくとも243通以上の郵便が行き交っている。多田は明治37年3月18日に朝鮮半島の鎮南浦に上陸しているが、郵便は1カ月以上たった4月28日に始めて「故郷友人に手紙を認め」たとある。その後6月2日に「親戚・友人への手紙を認め」、6月13日に「父母への手紙を認め」ている。内地からの郵便は8月14日の叔父の佐村木勝吉からものが始めてで、全期間を通して最も多い26通である。9月にはこれまでにない、10通ものやり取りを行っている。9月16日の日記には「戦後始めて父母・親戚・知己へ手紙差出せり」とは、戦闘を続け遼陽が陥落したことにより軍事郵便が出せることになったことをさす。10月は行軍と戦闘の繰り返しで手紙を出せなかった。11月には冬季に入り戦闘も膠着し手紙の送付が行われるようになった。明治38年4月15日の日記には「父より手紙着し、其文面によれば二月以来手紙来らず故、以後は月二度宛は必ず発信すべきを申し来たれり」とあり、その後に月あたり20通以上が授受されている。家族との絆に軍事郵便の果たした役割は大きかった。また、軍事郵便は戦場と内地をだけでなく明治38年11月17日の日記には「在金家屯の高橋乙吉より手紙」とあって戦場と戦場を結んだ郵便もあった。内地からの郵便に同封されるのは「新聞」が最も多く52通である。戦局の情報と共に、内地の情報が新聞を通して戦場へと伝えられた。例えば明治38年9月13日の日記には「木谷君より新紙（新聞）来れり。而して新聞の講和条件は悪評益々猛烈にして河野・広中氏等は本日五日を以て上奏せりとは真か偽か」とある。これは同月5日の「日比谷焼き討ち事件」のことを指しており、戦場へと8日後に内地の情報が伝えられている。このほか、明治38年1月30日の日記には「小立鉦四郎氏より書籍一冊送れ来れり」とあり、様々なものが送られた。多田は多くの軍事郵便を出しているが写真についての送付の記載はみることができないが、送った可能性が高いものと考えられる。

茂沢も戦場と内地を結ぶ手段として軍事郵便を706通もやり取りを行っている。また、日記には308回もの軍事郵便に関する記述がみられる。明治38年7月には79通もの郵便のやり取りを行っている。同年7月の日記に郵便の記載がないのは7日、8日、12日、25日、27

日、28 日、29 日だけでほぼ毎日郵便を授受している。また、郵便に関する日記の記載も詳しく記されているのが特徴であろう。明治 38 年４月 13 日に「慰問袋」を受け取った際に同僚の兵士から「オイ、君のには美人絵葉書があるなあ。僕のを見ろ靴下に鉛筆さ、また巻紙に封筒、筆に手帳、おお、多々的好々だなあ。そうか君は一番多く手紙を出すからよいのが来た。ちょうどお似合いだよ」と言われたことを日記に書いている。このような日記の記載からも、茂沢は一般の兵士よりも多くの郵便を書いたとみられる。また、日記も詳細かつ自分の意見もはっきりと書いている点で極めて稀有な内容を持っている。

茂沢は明治 37 年３月 27 日に多田と同じく朝鮮半島の鎮南浦に上陸。内地に郵便で送ったのは明治 37 年４月 12 日で「茂沢日記」には「手紙を出さるるのことにて小酒井君と本間、中沢実家へ手紙を送った」とあり、手紙が出せる状況になると直ちに郵送している。茂沢は軍事郵便で「写真」や「日記」をたびたび送り、内地よりも写真が送られている。

写真の最初の記述は「茂沢日記」の明治 38 年５月 11 日に「実家より封書と新聞（中略）の中に写真二枚と押花が入れてあった」とあって、実家から「写真二枚」が送られてきたのが最初である。同年５月 31 日には「実家へ日誌を入れ（写真在中）封書を出す」とあり、茂沢は実家へと「写真」と「日誌」を送っている。同年７月 31 日の日記には西沢平蔵から茂沢出身地である長岡町（日露戦争当時、家族は東京へ移住）の水害の被害などを知らせる手紙が来て「（西沢の）写真を送るから自分（茂沢）の写真を送ってくれと記されてあったが、それにはさっそく、水害見舞いの絵はがきと封書を送って報いた」とある。はっきりと自分の写真をおくったとはないが、「報いた」とあるので送った可能性が大きい。同年８月 24 日には「雨宮という人から自身の写真を送るから長く交際を望むという手紙が来た」とある。８月 30 日には「東京のうちから（本間）美喜さんの名で妹たちたち二人の手紙と、美喜さんの手紙、それにおさくどんと源ちゃん、文ちゃん三人して写した写真を入れて封書が来ていた」とあり、使用人の「おさくどん」と、弟の「源ちゃん」、妹の「文ちゃん」の写真は郷愁を誘うものであったと思われ、翌 31 日にすぐに本間美喜や実家へと返事を出し、９月４日には「実家へも写真三枚」を送っている。また、９月 13 日には「９月２日付、柏屋の喜代より手紙の中に写真を入れて送られた」とあり、その夜に茂沢はすぐに喜代に手紙の返事を送った。10 月 21 日には「写真六枚を入れて長嶋さんに送る」、11 月８日「丸辰さんと本間へ（写真を入れて）手紙を送る」とあり、知り合いにも写真を送っている。11 月 25 日には「実家へ送る手紙を送る中に写真を入れて」送ってとある。このように写真は家族だけでなく知り合いへも送られ、さらに内地からも写真が送られ戦場と内地を結ぶ手段となっていたと考えられる。

茂沢は日記を多田と異なり実家などへ軍事郵便で送っている。日記をはじめて送ったのは明治 38 年３月 29 日で「小酒井君と小林清次君と実家に日誌を特別第二号として送った」とあるのが最初である。実家だけではなく友人にも送っており、同年 10 月 31 には「美喜太君、雨宮君、小酒井兄、丸辰さん、それら実家へ日誌を送る」、11 月 12「日誌を入れて美喜さんに封書」との記載がある。一般的には上述した「参謀長の命令」に従って、２・３日分をまとめて送るのが基本で５月 18 日、５月 19 日、５月 23 日、５月 31 日、６月２日、６月 12 日、６月 30 日、７月１日、７月５日、７月６日、７月 13 日、９月９日、９月 15 日と送付している。しかし、明治 37 年分の日記は送らないままになっていたようで、明治 38 年６月２日に「実家へ昨年の日誌の一部を入れて送った」、６月 28 日に「実家へ送ったのは昨年の日誌である」とあり、７月 11 日には「実家へ昨年の日誌を送ったが、これで 37 年の３月からの日誌は全部送った」としている。また、９月 14 日には「軍靴日誌を各人に分配」とあり隊員たちにも日記を渡した。また、明治 37 年 11 月 25 日「（前略）小酒井君のところへ五月一日に拾った露国夫人の写真と、自分が負傷当時に胸へかけた札と露兵の軍隊手帳入れた封書を送った」、同

年12月4には「小林君と中沢君へ（露兵の軍隊手帳を入れて）手紙を認めて出す」、明治38年3月26日には中島辰五郎さんのところへ露兵の物を入れて送る」、38年4月1日の日記には「実家へ送る手紙を認め（第12号）、清・露の銀貨と支那の名刺と、負傷当時胸にかけられた手紙を入れた」とあり様々なものを送っている。内地からの同封されるものは明治37年には「はがき」や「兄弟たちの手紙」などであったが、明治38年になると4月15日、5月15日には「美人絵葉書」が、さらにエスカレートして6月25日に「裸体婦人の写真」、8月21には「絵はがき（裸体画3枚）」が送られてきた。奉天会戦による勝利によって、「兵士のおねだり」と「緊張感のない戦場」が見えてくるが、戦場と内地を結んで軍事郵便と日記などによって内地にも「緩み切って安穏な戦場」が伝えられていたものと考えられる。

なお、茂沢の手紙や葉書には内地の発着日が記されているものもあるが、明治37年5月には18日間で到着していた内地からの郵便は同年9月には15日間程度に短縮され、11月になると短ければ10日程度で到着している。戦闘中は15日以上かかる日もあるが、明治38年7月頃からは9～10日と短時間で内地と軍事郵便は運ばれている。

このようにかなり自由な軍事郵便も、日本への帰国直前に検閲が行われはじめた。茂沢は明治38年9月20日の日記につぎのような自らの心境を吐露している。

> 小酒井兄に書簡したが、今日の会報によれば、今日以後の書簡はすべて開封のままに差し出し、特務曹長手を経て大隊の検査済みでなければ郵便局では扱わず、また表皮に書くべき軍事郵便の銘は、朱書きまたは朱印のほかは一切取り扱わずと。それがため後備の中山宛に出した手紙が戻された。中隊で、長谷川伍長と渡辺伍長の二名の手紙は連隊で開封され、文中時局に関した文句ありしためにそのまま返戻されたが、自分の出した手紙は届くであろうか。兵隊は実に情けない境遇である。社会の人が自由を束縛せらるると何のと喧しく騒ぐ。その不自由を忍んでも忍んでも未だ足らずに今日のごとき命に接す。「人生兵隊たるべからず」と自分はあくまでも絶叫する。自分はその渦中に陥った不幸児で…

さらにこの軍事郵便への検閲に対し、9月27日の日記にも茂沢の心境と批判が記されている。

> 父上と小妹より手紙が来たが、返事は書く手はあっても、中途多くの人の検閲を受けねばならぬつらさには、否突っ返されるるつらさには、出すこともならず、また兵隊としての苦情が出た。

しかし、実際の検閲はさほどの厳しいものではなかったようである。検閲で秘匿にされたのは部隊の編制、人員、細かい場所、作戦の時期などであり[16]、どの日記も伏字を用いているのはこれら上記の事である。この検閲が開始された後も徐々に軍事郵便の件数は少なくなっているが徹底はされてはいない。茂沢の11月11日の日記には「本日の会報に、手紙は内地より寄こさざるよう内地人に注意を与えること」と命令が下っているにもかかわらず、手の打ちようのない状態が続いたのであった。

それでは「緒方日記」から郵便の記載を全てあげてみよう。日記によると、惟芳がはじめて郵便を受け取ったのは明治38年1月3日であった。

1月3日　「夜に入り、父より来る信書を見てふるきを思ひ悲大となる」
6月7日　「出発準備そこそこにして国元へ書状を認めたる後、午後十一頃床に就く」
6月10日「入浴の後、故郷への書状を認め、午後十時眠に就く」
6月14日「本日入浴の後昼食を終り、野川曹長の宿営に至り、彼の手紙五、六本を認め、供養に逢ふて午後十時頃営に帰りたるに、松原看護手

よりの手紙あれば之を一読して、内地看護手の事状、地震の有様等詳しく報に接し床に入り眠に就く」

6月22日「本日より病の快復したるを幸として、故郷、其他知人への信書を認めたる後、物理学の研究を中興す。

7月6日「夕食を終り用事の為め他所せる途中、石田より一書を受け開封すれば、父の死亡通知、不幸の極で甚だ落胆せり」

7月8日「本日より図書の取調をなし、例（礼）を内地の書信を認めたり」

残念ながら惟芳の日記から写真を送ったことは確認できなかった。最初の惟芳の受け取ったのは明治38年1月3日の父の尚一から便りである。当時は沙河の会戦で決着がつかず、敵との膠着の状態にあった。惟芳の父尚一は天保13年（1846）年に生まれで、安政元年（1854）11月11日に8歳で家督を相続している。惟芳は明治16年（1883）3月19日に誕生しており、尚一は37歳であり遅い長男の誕生であった。明治36年（1903）10月12日に尚一は隠居し惟芳が戸主となった。同年12月15日に惟芳は初年兵となっており、この入隊を受けての家督相続であった。すでに父尚一は57歳であった。惟芳が年老いた父や母のことと暮らした頃のことを思いだし悲しみに暮れているのも当然のことであろう。その後惟芳は明治38年の1月25日から同月29日までの黒溝台会戦の戦闘、翌2月21日から3月10日までの奉天会戦に直接参加した。この奉天会戦は前述したように世界最大の激戦であった。惟芳は傷ついた兵士の治療に3月30日から5月2日まで崔家堡舎営病院で治療にあたった。日記によれば惟芳がようやく故郷へ手紙を出したのは6月7日のことである。同月10日にも入浴した後に就寝までの時間を利用して故郷への手紙を出している。同月16日には野川曹長の宿営まで行って彼の手紙の代筆も行っている。惟芳は代筆を行う程度に字も文章も得意であったのであろう。その彼が日記を途中でやめるからには、それ相当の理由があったものと思われる。また、その日には明治37年10月11日に病気のため帰国した松原看護手から「内地看護手の事情」や「地震有様（6月2日の芸予地震のことか）」が知らされている。7月2日には夕食後に石田からの手紙によって父尚一の死亡通知を受け「不幸の極で甚だ落胆」している。7月8日は「例を内地の書信を認めたり」とあるが、この「例」は（礼）の誤字で、父尚一の死に戦地にあって何らできなかった内地の人々の礼状と考えられないであろうか。この7月8日を以て惟芳の日記が終っている。直接的原因は父尚一の死亡であった思われるが、徐々に日記を書くことが少なくなっているので、それだけの理由でやめたとするのは不十分であろう。

おわりにかえて

以上のように日露戦争の「日記」や「写真」の多くは「軍事郵便」によって送られたことがわかった。緒方惟芳によって「写真帳」にまとめられた「写真」は、その保存状態が良いことから軍事郵便で送った可能性が最も高いと考えられる。おそらく「日記」も軍事郵便で送られたものと思われる。また、「写真2滞在中の娯楽の様子」の写真から、意図的に写真が撮られたことも分かった。これは当時の写真技術と露光時間によるが、軍の記録としての側面も大きかったと考えられる。

ここで、今後の研究として注目すべき日露戦争の日記についてまとめておきたい。

海軍の情報将校であったドナルド・キーンは「私が日記への強い執着に気付いたのは戦争中のことであった。その時何か月も、私の主な仕事は、戦場に遺棄された日記を翻訳することである」とし、「日本人の日記への強い執着」から「戦争の日記」に興味をもった動機を記している[17]。確かに戦場で日記や手紙を書くのだから、日本人は日記や手紙を書くのが好きだったことは確かなことであろう。茂沢は明治38年（1905）6月15日に日記を書く理由を次のように記している。

坂井君は日誌の無用論を主張するが、僕はあくまでも有効と認める。なにゆえ有効であるか、後日これを繰り返して教育の材料となし、その時代の志想を知り。ありし昔を思い出して楽しむこともある。そのかわりに悲しむこともないとも限らぬが、多分おいて有効に違いない。しかし日誌にはすべて自分の所感を記すのが必要と思われる。

茂沢は、日記を「教育の材料」とすることから「多くの人々に読まれる」ことを意識し、毎日の戦場での出来事を書き、情報を記した会報や同僚の情報、さらには内地から送られる郵便に入れられた新聞などで日記を補足し、さらに帰郷の後に手を加えている。また、「日誌の無用論」を主張した「坂井君」も明治38年7月27日の「茂沢日記」によると「坂井君もこの頃は文章的に日誌を記しはじめた」としている。これは茂沢が日記を書くことへの執着への正当性を示しているものであろう。多田や西川は茂沢のように日記を書く理由を記していないが、最終的に帰郷して清書をしてまとめることからして、「誰かに見られる」「誰に読んで欲しいと」いう意識があったに違いない。このような茂沢、多田、西川の日記に対して、「緒方日記」の文章ははるかに短く書かれていて量も少ない。途中で日記をやめていることから茂沢らのような執着心はあまり感じない。

しかし、日露戦争の日記が現在のように「一日も欠かかさない日記」になったのは軍事郵便で送られてきた「日記」そのものであった訳ではない。「多田日記」の「後記」には、「私は父から、書いた日記を数日分まとめて郷里に送り、除隊後に保管してあったのを清書して2冊のノートにまとめたものと聞いておりました」とある[18]。このような手直しを経て「多田日記」は完成した。「茂沢日記」は162頁の罫紙に書かれる本文は各行に罫内に2行ずつ毛筆の細字で書かれている[19]。戦場で日記を毛筆で書くと雨や汗などで滲むので鉛筆で書くのが普通である。戦闘の中ではメモ程度を書いたとしか思えない。「茂沢日記」には度々「日記の複写をやっている時に」とあって原本からの書写が行われた。その際に手帳や記憶、戦闘状況を記録した「会報」や「同僚からの情報」、内地から郵便で送られるに「新聞」などを参考に日記を書き直した。さらに戦場から内地へと帰ってからも再度書き直しが行われたのかもしれない。「西川日記」も「墨書縦書きの四七枚の紙の和紙（縦罫線二〇行印刷）を袋綴じにした紙縒で閉じた冊子である（中略）これは手帳などの記録を、復員後に清書したものと思われる。そう考えられる根拠は、自筆本の和紙が非常に奇麗で、戦場を持ち運び記録したとは思えないこと、筆の運びが一定であり日毎にかいたとは思えないからである」[20]としており、戦争から帰った後に書かれたものと考えられる。「根来日記」も墨書きで詳細な地図もあり戦地で書かれたとは到底思われない。明治38年10月5日には「午前は例によって日誌清書」とあり以前から暇を見つけて「清書」をしていた。同年11月11日には「夜勤中、上陸以来本日までの日誌完成したれば之を一冊となしぬ。此の日誌之なり。今までは、滞在中の頗る粗記し、発・来簡、其他簡約したるも、本日以降後はなるべく事実の全部を記入せんとす」とあり日記が完成している。本論では直接は検討しなかったが、伊佐春作の従軍日誌は鉛筆書きで明治37年から38年までの3冊の日記を残しているが、それを日本帰国後に再度書き直して「従軍日誌」としている[21]。日記はまず戦場でメモとして書かれたもの、それを後に記憶や情報が加筆され補訂や削除などを行い内地に軍事郵便で運ばれた日記、内地に帰って清書される際にさらなる改定を加えられたものがあった。日露戦争の日記にはさまざまな段階のものがあり、より一層の検討が必要となる。

「緒方日記」は戦場において鉛筆で書かれ「メモ」として書かれたものであり、その後に写真と共に内地へと送られたものと考えられる。また、明治38年7月8日で日記の記載は終わっており、父尚一の死亡が直接的原因であろうと思われる。しかし、その11月にそれまでの出来事を日記に略述しているはなぜだろうか。惟芳が「緒方日記」をやめるまで毎日欠かさず

に日記を書いたとすれば302日分となる。明治38年５月５日から６月６日の31日分がメモ帳に何も記されずに12頁が空白となっている。５月４日の日記は「本日晴天暖なり。午前五時より床を出で直に出発の準備をなし同七時半出発東北方に向ひ」と、途中で「切れたように」終わっている。「北方に向かひ」の内容は２冊目の日記の冒頭に「崔家堡 - ５- 鈎鐘屯 - ７- 營盤-6.5- 西小河口 - ８- 北紅崖 -8.5- 三家子 2.9（内五月三十一日は鉄嶺東門外ニ宿ス）- 昌圖附近占領の命降る。三家子 - ４- 楊堡 - ７- 南岑（内楊堡行の命あり。その為め白虎営座、馬千台ニ各一宿ス）」（数字は行軍の里程）とあり、その期間の行動と考えられ、後にこの間の日記は記すつもりではなかったのであろうか。また、同年６月24日から29日の６日分が記載されていない。何かを少しでも書いている日記の記載分は265日分である。しかしその内容は「月･日･曜日　天気」のみの場合や「本日無異」と記すものもあり、内容がない47日分が見られる。惟芳の日記の記載は219日分のなかで73パーセントしか記載されていない。１冊目の明治37年の日記は１日も欠かさず書いていたのが、２冊目は目の明治38年４月１日～６月８日の日記にいたっては94日の中で、日記の内容があるのはたった43日分しかなく半分以下しか書かれていない。他の日露戦争の日記はほぼ毎日書かれているのに、惟芳の日記は徐々にその記載が少なくなり、やめているのである。７月８日の冒頭に日記を書かなくなった理由を「本日より以降、多事、心労し為めに日誌の思ひも何時しか去りぬ」とある。惟芳は「多事･心労」とは、父尚一の死のみを指すのではなかろう。

前述の多門二郎の明治38年２月３日の日記には「師団から兵卒の手紙などは一切焼きするようてるよう」と命じられており、「多田日記」の明治38年４月４日にも参謀長から命令では下士以下に日記の記載を禁じたうえで、日記の２、３日分を郵送か梱包で送るか、焼却処分するかの選択が隊に委ねられ、さらに同年６月30日の日記には「手紙や日誌は不要の場合焼き捨てよ」と再度の命令が出された。このような日本兵の書いた日記や軍事郵便によるロシア軍への情報漏れと再三の「中止命令」は惟芳にも届いていたはずであり、その命令が影響したのであろうか。また、他の兵士が日記を書き続けているのはどうしてであろうか。本論は日露戦争で兵士たちが残した「日露戦争の日記と写真と軍事郵便」につていの研究の序論でもある。

註

１）礒永和貴、山本孝夫「陸軍看護兵『緒方惟芳』の日露戦争（１）」東亜大学紀要20号、2014年、33～61頁および礒永和貴、山本孝夫「陸軍看護兵『緒方惟芳』の日露戦争（２）」東亜大学紀要25号、2017年、64～73頁で史料紹介をおこなった。所蔵者は惟芳の長男である緒方正道氏で、現在は筆者が保管している。本論の日記は旧字体を新字体に、（　）で筆者の注を記した。日記には現在では不適切と思われるものもあるが、歴史的事実を重視しそのまま採用した。

２）本論では、「戦場」と「内地」という日記に見られる用語を使った。非戦闘員である一般国民をさして「銃後」という用語があるが、それは昭和12年12月18日の「第七十三回帝国議会開院式勅語案」（JACAR〈アジア歴史資料センター〉Ref. A0100733400）「朕が銃後の臣民」とあるのが公式な初出と考えられる。日露戦争当時は「戦場」と「内地」が一般的であった。

３）代表的な写真集に『日露戦争実記』や『日露戦争画報』などがあり、それらを検討した著作には、井上祐子『日清・日露戦争と写真報道 - 戦場を駆ける写真師たち - 』吉川弘文館、2012年など多数がある。

４）多田海造『日露戦争陣中日記 - 一看護兵の六七五日 - 』巧玄出版、1979年、323頁。

原本は個人蔵。

5）西川甚次郎「日露従軍日記」刊行会編『日露の戦場と兵士 - 第四師団野戦衛生隊担架卒の目から見た戦争 - 』岩田書院、2014 年、178 頁。原本は個人蔵で原題は「日露戦争従軍日記」。

6）茂沢祐作『ある歩兵の日露戦争従軍日記』草思社、2005 年、349 頁。原本は、防衛研究所蔵「茂沢祐作　明治 37・８年戦役従軍日誌　全」史料番号 / 戦役 - 日露戦役 -377。

7）根来藤吉『夕陽の墓標 - 若き兵士の日露戦争日記 - 』毎日新聞社、1979 年、334 頁。原本は個人蔵で原題は「征露日誌」。

8）加藤健之助（大江志乃夫監修）『日露戦争軍医の日記』私家版、1980 年、243 頁。原本は個人蔵で原題は「日記」。なお、本書の口絵に 19 点の加藤が撮ったと写真が掲載されている。

9）前掲５）の解説、延廣壽一「日露戦争の従軍日記」の 145 頁によれば「日露戦争従軍日記」は全国に 122 編が残存しており、本論ではその一部との比較を行ったに過ぎない。また、本論の「茂沢日記」は原文を現代的な表記に改めているがそのまま採用した。

10）「根来日記」では 11 月 11 日に「毛皮チョッキ」が「給与」されている。

11）前掲５）40 ～ 41 頁。

12）新井勝紘「軍事郵便の基礎的研究（序）」国立歴史民俗博物館研究報告 126、2006 年、74 頁。また、新井勝紘「パーソナル・メディアとしての軍事郵便 - 兵士と銃後の戦争体験共有化 - 」歴史評論 682、2007 年において「兵士と銃後の戦争体験共有化」とし、これに対して一ノ瀬俊也『故郷はなぜ兵士を殺したか』角川書店、2010 年では軍事郵便の慰問文に注目し「死の憑湧」すなわち銃後から兵士に対して「名誉の戦死」を迫るものとしてまったく逆の意見を述べる。これに対して後藤康行「戦時下における軍事郵便の社会的機能 - メディアおよびイメージの視点からの考察 - 」郵政資料館研究紀要第２、2011 年、56 頁に「どちらとも軍事郵便が有していた機能」としている。これらの論者が対象とした戦争は日中戦争以降であり、日本がより軍国化する中で進んでいった道も考慮する必要があろう。

13）前掲５）藤井恭二「コラム　軍事郵便」に記されている。

14）多門二郎『多門二郎　日露戦争日記』芙蓉書房、1980 年、346 頁。

15）ドナルド・キーン（金関寿夫訳）『百代の過客 - 日記にみる日本人（上）日本人 - 』朝日新聞社、1984 年に 14 ～ 18 頁。

16）藤井忠俊『兵たちの戦争 - 手紙・日記・体験記を読み解く - 』朝日新聞社、2000 年、60 頁。

17）前掲 15）14 ～ 18 頁に詳細な論述がある。

18）前掲４）321 頁に長男の多田秀雄が回顧している。

19）前掲６）兵頭二十八「解説 - 自身と対話する一兵卒 -」９～ 10 頁。

20）前掲５）解説、横山篤夫「西川甚二郎『日露戦争従軍日記』との出会いとその特徴」138 頁。

21）伊佐治春作原著（伊佐治敏編）『日露戦争従軍日記―駒のいななき―』私家版、2004 年、４頁。

Diary of Russo-Japanese War and photos and military mails

Kazuki ISONAGA
Department of International Exchange Studies, Faculty of Human Sciences, University of East Asia

Abstract

During the Russo-Japanese War, many soldiers' mysterious and secret diaries were originally written by soldiers, and military mails connecting between the battlefield and the home country were frequently exchanged, and diaries and photographs were also enclosed in them. In this paper, we examined the diary and photographs of Ogata Tadayosi, who used to be an army nurse soldier, by comparison with other typical diaries. As a result, I found that while many diaries revised on the battlefield by censorship and also later in the home country, the diary by Tadayosi Ogata was actually the one written on the battlefield, and the photographs were also taken there.

Key Words : Russo-Japanese War, army medics, war diaries, military mails, war photo books, shooting, military secrets, censorship